

国際結核肺疾患予防連合（ユニオン） 第50回肺の健康世界会議がインドで開かれる

結核予防会から10名が出席し、結核研究所抗酸菌部結核菌情報科の村瀬良朗科長に本記事を執筆いただきました。第22回秩父宮妃記念結核予防功労賞・世界賞の授賞式も行われ、その様子もご覧ください（表2）。

第50回肺の健康に関する世界会議が国際結核肺疾患予防連合（ユニオン）主催のもとで2019年10月30日から11月2日、インドのハイデラバードで開催された。開会式では厳戒態勢の中でインド副首相が登場し、結核、大気汚染、タバコ対策の必要性を訴えた。もう一つのハイライトはインド人ジャーナリストのナンディータさんのスピーチであった。長く辛い多剤耐性結核の治療を幾度も乗り越えた彼女が民族衣装を纏い、毅然とした態度で「結核に苦しんだ元患者からの要望を聞いて欲しい」と訴えかける姿に多くの参加者が耳を傾けていた。今回の会議のテーマは「緊急事態の終結：科学、リーダーシップ、行動」であり、近年の科学的成果を取り入れた結核対策が世界的にあまねく確実に実行されるために必要な方策が熱心に討議された。本会議の主要セッションがYouTubeに公開されているのでご覧頂きたい。

全体の流れ

今回の会議では初の試みとして、結核からの生還者を中心としたサミット会議が企画され、安価な治療薬の提供を求める意見がNGOを中心に声高に訴えられた。こうした声に応えるかのように、リファペンチンの価格を66%値下げするというサノフィ、ユニットエイド、グローバル基金間の画期的な合意が会議期間中に速報された。リファペンチンは活動性結核や潜在性結核治療薬として用いられており、結核やHIV合併結核の負担が高い低・中所得国においては特に歓迎される出来事となった。また、グラクソ・スミスクラインが開発を進める結核ワクチンがトライアルにおいて50%の大人の肺結核発病予防効果を示したという有望な結果が報告され、会議参加者の注目を集めていた。他にも、患者の早期発見を目指した検査法・診断法の開発、ベダキリンやデラマニドを用いた多剤耐性結核短期治療法の評価、WHOによるタバコや電子タバコの規制に関する会議など多岐にわたる報告がなされた。

結核予防会関連の発表

結核予防会では「我々は未診断の結核患者を戦略的な方法で見つけ出せるか？」と題するワークショップを主催した。世界では活動性結核の診断がなされないままコミュニティで生活している患者が数多く存在しており、こうした結核患者を革新的な技術で効率的に発見することを目指す意欲的なワークショップであった。発表は、ミャンマー、韓国、日本、カメルーンから行われ、持ち運び可能な胸部画像診断装置や尿中の結核抗原検査、喀痰からの迅速診断キットなど、本邦発の技術を患者発見に結びつけるための研究成果が報告された。例えば富士フィルムが開発を進める胸部画像診断装置は、一人で持ち運び可能な小型の胸部画像撮影装置にバッテリーと画像診断用の人工知能を搭載しており、読影専門家がない僻地や途上国でも結核検診を可能にする装置として注目を集めていた。また、尿を滴下することで迅速・簡便に結核診断を可能にするTB-LAM検出キットもHIV陽性結核患者の発見に貢献することが期待される。会場は立ち見が出るほどの盛況であり、この分野に対する世界的な関心の高さが伺われた。また、結核研究所の研究者がタバコと結核に関する研究発表をシンポジウムで行なった。

国際研修卒業生同窓会では、関係者40名が集まり、近況報告をするとともに互いの旧交を温めた。

次回、スペインのセビリヤで2020年10月に開催される予定である。2030年までの結核終息に向けた更なる研究と対策が進むことを期待する。🐼



開会式でスピーチするナンディータさん